

## 生物的生と人間的生についての覚書

秋田丈瑠

### 1. 「生命とは何か」とは何か

自然科学者が生命を語るときと哲学者が生命を語るとき、どうも二者は全く違うことを話しているように見える。自然科学者は当然、生化学や生態学、物理学、最近では情報科学の領域も嚙んで、生物学として議論する。当然それで生命の全てが分かっているわけでもないので、彼らはいくつかの哲学的議論（例えば意思はどのように存在するのか、など）の余地を残して議論を終える。ところが哲学者は、そういった生物学的な側面に生命論が還元されるのを恐れてか、これを攻撃することがままある。例えば、ハンナ・アーレントは次のように言う。

たとえば科学者は、原子の中の「生命」について語っている。その場合、明らかにすべての分子はそれが欲するままに振舞う「自由」をもっている。そしてこのような分子の運動を支配する法則は、社会学者のいう人間行動を支配する統計的法則と同じものである。このような統計的法則によって、個々の分子がいかに「自由」に選択しているように見えようと、多数者は必然的な行動に駆り立てられるのである<sup>27</sup>。

シュレディンガーが『生命とは何か』という著書で、生命活動、とりわけ細胞内の原子、分子、また遺伝子などがどれくらい物理学的な制約を受け得るかについて著した。その中で彼は、代謝（細胞内での生化学的な反応全体、例えば呼吸による栄養素の分解とエネルギーの取り出しなど）が無秩序へと向かう物理の「統計的法則」を無視しているかのように見え、

---

<sup>27</sup> ハンナ・アーレント著、志水速雄訳（1994年）『人間の条件』ちくま学芸文庫、500頁。

それを実現するものを自由エネルギーと呼んだ<sup>28</sup>。この自由エネルギーはのちにアデノシン三リン酸 (ATP) という物質に相当することが分かり、この ATP が食物の栄養素などから合成されて生体の各所でエネルギーを放出することであらゆる生物の様々な活動が実現される<sup>29</sup>ことが判明した。なるほど、あらゆる生物の活動に ATP が関わっているのであれば、これは生命とは何かを考える上で重要な生化学的条件であるように思える。しかしアーレントはこういった説明に納得しない。それは「あたかも私たちが、自分自身の人間存在から遠く離れてしまったかのように、この社会で眺め生きているからである」ことの証左であり、その眺めからは「人間の活動力はどれも、もはやどんな活動力にも見えず、ただ一つの過程としか見えない」<sup>30</sup>からである。

無論、彼女の『人間の条件』は生命論ではないため、彼女が「生命とは何か」という問いに答えた場合、違った答えを出すかもしれない。しかし言うまでもなく人間も犬や蝶や微生物や細菌等々と同じく生命であり、生命のあり方がどれだけ非人間的なものであっても、それは他の生物と共通に語ることができなければならないはずであるが、まさにそうであるがために、生命の条件が人間の条件を毀損しているかのように主張しているように見える。

同じことがジョルジョ・アガンベンのも主張にも言える。

二〇世紀のさまざまな全体主義で賭けられているものは、そういった〔ナショナリズムや帝国主義のような〕ものとはまったくちがうものなのであり、もっと過激なものだ。なぜなら、そこで問題になっているのは、……人民の剥き出しの生を使命として引き受けることなのだから。(中略)

すなわち、……ふたたび動物と化した人類には、家政=管理〔オイコ

---

<sup>28</sup> エルウィン・シュレーディンガー著、岡小天、鎮目恭夫訳 (2018年) 『生命とは何か—物理的に見た生細胞 [電子書籍版]』岩波文庫, 128頁。

<sup>29</sup> 嶋田正和・上村慎治ほか編 (2019年) 『大学生のための基礎シリーズ2 生物学入門 (第3版)』東京化学同人, 60-61頁を参照。

<sup>30</sup> アーレント (1994年), 500-501頁。

ノミア] を無条件に拡張することによって、あるいは、生物学的な生そのものを最高の政治的(あるいはむしろ非政治的)な課題に格上げすることによって、人間社会を脱政治化する以外に、何ひとつ残されていないということである<sup>31</sup>。

アガンベンはその著書『開かれ』で、ビシャ、リンネ、ヘッケル、ユクスキュルといった人物を取り上げ、彼らによって「獲得されるべきものは、動物的な生でも人間的な生でもなく、ただ自己自身から排除された生—剥き出しの生—だけなのである」<sup>32</sup>と言う。それにもかかわらず、彼の取り上げる事例はどれも人間と動物を区別するために役に立つと考えられるもの—分類学や猿人の骨の発見など—ばかりであり、細胞云々の話などは一切取り上げられていない。剥き出しの生(生物学的生)についての政治的な罪禍は確かにあるかもしれない。しかしその議論は、おそらく生命論の圏内ではありえない。

二人の共通点として、人間的生の存在、および在り方を訴えようとしている点を見てとることができよう。しかし、まさに「生」という言葉を使っているために、生命論でよく前提される生物(学)的生との混同が発生している。このことこそ、生命論上の混乱を最も表現している部分ではなからうか。それゆえに我々は、二者択一ではなく、二つが共立するような生命論を考えるべきではないだろうか。生物的生の範疇には当然人間も含まれるため、人間の生についても、生物なのだから同じである、と言いたくなるのは分からなくもない。しかし、それは明らかに短絡である。とはいえ、生命をまるで人間の特権のように語り生物的生を批判するのは極めて疑わしいことだろう。両者は適切な距離を保ちつつ、それぞれの領野からそれぞれの語法で探究されるべきである。ジョルジュ・カンギレムの次の発言は、これまでの議論を的確に表現しているように思われる。すなわち、「人間的な生命は生物学的な意味、社会的な意味、実存的な意味をも

<sup>31</sup> ジョルジュ・アガンベン著、岡田温治司・多賀健太郎共訳(2011年)『開かれ 人間と動物』平凡社ライブラリー、133-144頁。

<sup>32</sup> 前掲書、30頁。

つことができる」のであり、「人間はただ木とかウサギと同じように生きているのではない」<sup>33</sup>のである。

## 2. 生物的生—生命と生への問い

生命一般、つまり生物的生についての見解は<sup>34</sup>、それを構造やシステムに見出している向きがあるように思われる。例えば科学哲学者のカンギレムは、「生命は諸形態〔formes〕の形態化〔形成 formation〕である」と言う<sup>35</sup>。また生化学者のニック・レーンは「生命は結局のところ構造（一部は遺伝子や進化に決定づけられている）」であると言い、さらに「生命(Life)」と「生(Living)」を峻別して、「生—成長(生長)や繁殖(増殖)—はそれに加えて環境でもあり、つまり構造と環境の相互の関わりなのだ」<sup>36</sup>と主張している。

いずれにせよ、構造を様々なもののあいだにある相互関係と考えるなら、この二人は同じことを言っているように思われる<sup>37</sup>。しかしこういう考えには、次のような批判がいつもつきまとう。つまり結局のところ、生命とは機械なのではないか、と。ちょうどデカルトがそう言ったように。

本当にそうなのだろうか。カンギレムによれば、そもそもデカルトの言う「生きた機械の製作は、……先在する有機的な所与を模倣する義務を含蓄している」のであり、「たとえ機械の働きが純然たる因果性の諸関連によ

<sup>33</sup> ジョルジュ・カンギレム著、杉山吉弘訳（2002年）『生命の認識』（叢書 ウニベルシタス 735）法政大学出版局、180頁。

<sup>34</sup> 具体的に見た場合、それは各々の生物に共通して見られる特徴を列举することで得られるだろう。例えば、自己境界性（細胞膜で内外が隔てられていること）、自己維持性（先の膜を介した物質輸送が行われ、エネルギー代謝を行なうこと）、自己複製性（遺伝物質による次世代への情報継承）が挙げられる（詳細は嶋田ほか、前掲書、1頁以降を参照）。とはいえ、こうした具体例からも、抽象的に考えて、生命が高度な構造を持っていることが窺えるだろう。

<sup>35</sup> 前掲書、7頁。

<sup>36</sup> ニック・レーン著、斉藤隆央訳（2016年）『生命、エネルギー、進化〔電子書籍版〕』みすず書房、87頁。

<sup>37</sup> あるいは、ジャン・ピアジェの言うような、方法としての構造主義、「構造が構造化する過程」としての構造（ジャン・ピアジェ著、滝沢武久・佐々木明共訳（1970年）『構造主義』白水社文庫クセジュ、142頁）として考えるのが良いかもしれない。ちょうどこれは、カンギレムの「形態化」にも付合しているように見える。

って説明されるとしても、機械の製作は合目的性なしでも人間なしでも理解されない」のである。カンギレムは続けて言う。「機械は、生産すべき結果として獲得すべき何らかの目的をめざして、人間によって人間のために作られるのである」<sup>38</sup>。これは機械が単に機構によってできているだけの存在でないのであり、また同じことだが、機構が存在していればそれはすべて機械である、とはならないと考えられる。確かに生命の構造には、多くの機構が見られる。しかし、それによって直ちに生命が機械であると見なすことはできないのである<sup>39</sup>。

ところで、レーンは生命 (Life) と生 (Living) を峻別し、もっぱら生を問うことを正当とした。彼は『生命とは何か』と題したシュレディンガーに対し、こう挑発する。「彼の本の象徴的なタイトルは、完全に間違った疑問を発していた。エネルギーを加えると、疑問ははるかに明白なものとなる。「生とは何か (What is Living?)」だ」<sup>40</sup>。

ウイルスは自身で代謝を行なえず、宿主に寄生することで生きている。しかし、まさにこの特徴ゆえに、ウイルスは生物に分類されていない。人間はどうだろう。食べ物から栄養を摂り、呼吸によって酸素を供給することで体内で代謝させ、生きている。代謝は自身によってしているが、しかし食物や酸素はそれらがある環境に頼っている。周囲に食べ物が一切ない部屋に監禁されたり、ビニール袋を頭に被せられ縛られ放置されたりすれば人間も死ぬ。ここから分かることは、程度の差こそあれ、生物もウイルスも環境に依存している、ということである。さらに興味深いのは、仮死状態に移行できるものが存在し、必要な環境から断絶されても差し当たり死なないということである。最もよく知られる例がクマムシだろう。また芽胞菌と呼ばれる細菌は生物に分類されているが、環境が生存に適さないものになった際、芽胞と呼ばれる細胞構造を形成し、代謝もせずに永久凍

<sup>38</sup> カンギレム、前掲書、128-130頁を参照。

<sup>39</sup> 機械なしに機構—技術が存在するという観点から、カンギレムは技術を人間特有の営為ではなく、むしろ生物的な現象として捉え直すべきである、と主張している（前掲書、138頁以降を参照）。これは技術哲学として極めて重要な観点であると考えられるが、本旨から外れるため、ここでは議論しない。

<sup>40</sup> レーン、前掲書、81頁。

土や宇宙空間を生き延びる—厳密に言えば、生きてはいないが死んでもいないような状態、蘇生可能な状態になる。ここにレーンの真意が隠されている。生命は、生に必要な構造さえあれば、生きている必要がない—蘇生さえ可能であれば—のことであり、その意味で環境すら必要条件に含まない。しかし生そのものは、エネルギー生産の動きそのものとそれに必要な環境—食物や酸素のある周辺環境や、寄生先の宿主など—がなければ実現できないのである<sup>41</sup>。

また、環境について興味深い実験がある。ヤコブ・フォン・ユクスキュルはダニを使ってある実験を行なった。ダニの成体の雌は哺乳類からの吸血と卵を孵化させるために、18年間も生存することができるのだが、ユクスキュルはこのダニを実験室に絶食状態で閉じ込め、18年間生きながらえることを確認した<sup>42</sup>。このあいだでもダニは代謝しているだろうから、そのダニは間違いなく生きている。しかしこのダニは絶食状態で実験室に閉じ込められているため、この環境はダニの生のための環境とは到底言い難い。アガンベンはこのダニの状態を「たんに生きているだけ」<sup>43</sup>と呼んだが、カンギレムはクルト・ゴルトシュタインの見解を引きつつ、このような実験室の環境は「すべての可能な関係のうちでもっとも生物学的な意味をもっていない関係」<sup>44</sup>という。アガンベンは「環境との関係の内部にどっぷりつかっていた生物が、その環境が絶対的に欠如した状態で、いかにして生き延びるなどということが可能だったのか」<sup>45</sup>と驚く。生存については単にダニがそれだけ耐えることができるというだけであるが、環境から切り離された生とはどういったものなのか、という点は興味深い。レーンの主張するように、生の条件として環境が関わってくるなら、ここにおける状況は（生存してはいるものの）限りなく生から遠いもの（しかし、仮死状態とも言い難い）であり、ある意味ではアガンベンの言うようなものよりもっと無機的なものである。環境は生を構築する上で重要なファク

<sup>41</sup> 前掲書、84頁以降を参照。

<sup>42</sup> カンギレム、前掲書、167-168頁。

<sup>43</sup> アガンベン、前掲書、126頁。

<sup>44</sup> カンギレム、前掲書、169頁。

<sup>45</sup> アガンベン、前掲書、84頁。

ターであることはもはや明らかだが、それがどれくらい必要なかは、今後のテーマになるであろう。いずれにせよ、それはもはや単に生命の外にあるものとするのも難しいだろう。

環境に生体から解放された生によって、レーンは次のように主張することができた。「はっきり言えば、無生物と生物は地続きで、そのあいだで線引きをしようとするのは意味がない」。このことは特に次の主張に強く見ることができる。

「生きている惑星」—地質学的に活発な惑星—と生きている細胞との違いは、定義の問題にすぎない、と私は主張しよう。そこに明確な境界線はない。地球化学的現象から生化学的現象は継ぎ目なく生み出される。この視点に立てば、こうした古い岩石〔グリーンランドで発見された太古の岩石のことを指しており、そこには生物由来とされるグラファイトが含有されていた。ただし、これが生命の決定的証拠であるとは言い切れないことをレーンは念頭においている：引用者注〕の地質学的特徴と生物学的特徴を区別できないのも当然と言える。……この両者は継ぎ目のないところを無理に引き裂かないかぎり、分けることはできないのだ<sup>46</sup>。

この主張は生命について、自然科学的であると同時に哲学的な議論を引き起こすように思われる。我々が生命と見做さないような構造にも、生命を見出すことができるのであれば、いったい如何なる構造が生命であるのだろうか。これを考える上で、ピアジェが構造の基礎を数学（特に群論）や論理に見ている点<sup>47</sup>を敷衍すると、情報の観点から生命の構造を考える

<sup>46</sup> レーン、前掲書、44頁。

<sup>47</sup> ピアジェ、前掲書、26頁以降を参照。ただし、数学の事柄をその他の分野で安易に用いることにはかなり注意を払うべきであろう。例えばジャック・ラカンが精神分析の理論において数学を用いたが、そのやり方がまずかったため、辛辣な批判を受けることになった（アラン・ソーカル、ジャン・ブリクモン共著、田崎晴明・大野克嗣ほか共訳（2012年）『知の欺瞞—ポストモダン思想における科学の濫用』岩波現代文庫、27頁以降を参照）。

のは悪い考えではないように思われる<sup>48</sup>。特に人工生命は、新たな構造の枠組みを考える上でも興味深い。岡瑞起は「生命という抽象的な概念を、仮想的な生命のモデルに一つひとつ落とし込むことで、コンピュータを使ったシミュレーションという実行システムで検証することは可能である。そして、その結果から現実の複雑な現象を読み解くことで、生命を理解する新しい方法を提供する」<sup>49</sup>と主張している。現代物理学においても、人工の元素を作って実験することで、原子内にある陽子や中性子に関する事柄を明らかにしようとする研究があり、佐藤文隆は「自然界に存在しない人工世界の構築は、目前にある自然の姿を炙り出し、自然自体の理解にも役立つことである」<sup>50</sup>と述べているため、上記のアプローチは科学的にも妥当な試みであると思われる。

とはいえ、見出した構造モデルに対して、結局どれが生命なのか、という困惑が起こる可能性を考えると、生命論において求められるのは、カンギレムやピアジェが言うような、生体やその環境、構造の「意味」がどういったものなのか、ということかもしれない。そしてそれはおそらく、哲学者のやるべき仕事であるだろう。

### 3. 人間的生—あるいは生命以上としての人間

アーレントは生物的生に対して、妙な嫌悪感を持っている。というのも、アーレントは生命（彼女は特に生と生命を区別しているようには見えない）を労働とかなりの程度同一視しているようだからである<sup>51</sup>。彼女は次のように言う。

<sup>48</sup> 情報の観点から生命を問おうとする試みについては、例えばポール・デイヴィス著、水谷淳訳（2019年）『生物の中の悪魔「情報」で生命の謎を解く』SBクリエイティブを参照。

<sup>49</sup> 岡瑞起（2022年）『ALIFE | 人工生命—より生命的なAIへ—〔電子書籍版〕』ピー・エヌ・エヌ、22頁。

<sup>50</sup> 佐藤文隆（2024年）『物理学の世紀〔電子書籍版〕』講談社学術文庫、180頁。

<sup>51</sup> 「労働—見捨てられた状態—自然的な力（したがって労働力）—生命」と図式的にまとめている（アーレント著、ウルズラ・ルツ、インゲボルク・ノルトマン編、青木隆嘉訳（2006年）『思索日記2 1953~1973』（叢書 ユニベルシタス 842）法政大学出版局、13頁）。

労働過程と生命過程は同一である。そのため哲学者たちはニーチェやベルクソンとともに突然、生の哲学において生命を称えようと思いついた。それは、労働を最高の活動にしてしまった時代精神に対応する彼らのやり方であった。労働過程と生命過程に特有であるものは、反復、成果のなさ、「それ自体の無意味さ」、必然性と努力の最終的無駄などである。

……生命もしくは生命からの解放に対応しているのは、もともと思慮と無縁で、無意味で容赦のない生の継続に抵抗する記憶であり、思想もそこから生まれる<sup>52</sup>。

アーレントは「労働」という言葉をかなり特殊な意味で用いている。

労働 labor とは、人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力である。人間の肉体が自然に成長し、新陳代謝を行ない、そして最後には朽ちてしまうこの過程は、労働によって生命過程の中で生みだされ消費される生活の必要物に拘束されている。そこで、労働の人間的条件は生命それ自体である<sup>53</sup>。

それゆえに、労働は生活費を稼ぐそれ以外にも、例えば家事もそこに含まれる。また、アーレントがこれを生命過程と結びつけるのは、マルクスによる労働の「人間による自然との新陳代謝」という定義に由来しており、それは生物的生の有限性（生まれ、ものを消費して生存し、最後には死ぬ）と労働の生産と消費（生存のために食べ物を作り、生存のためにそれを食べ、また作る……というような循環）を一致させている。それは誰しものがやらなければならないことであり、またそれはおおよそ生存以上の役には立たない、という意味で「無駄」なのである。それゆえに、誰もがやりたくないと感じる<sup>54</sup>。

---

<sup>52</sup> 前掲書、52頁。

<sup>53</sup> アーレント（1994年）、19頁。

<sup>54</sup> 前掲書、133頁以降を参照。

とはいえ、必然性の軛に繋がれている以上、労働は避けられないものであり、それ自体はアーレントも「人間の条件」に含めている。それだけであるなら、労働と生命の一致それ自体は特に批判の対象にはならないように思われる。何が問題となっているのか。

それはこの社会が消費者社会と呼ばれていることであり、それは以上の議論から取りも直さず、「私たちは労働者の社会に生きているということのいいかえにすぎない」のであり、「私たちが、労働という、生命の必要物を確保し、それを豊富に提供する公分母に、すべての人間的活動力を標準化することにほぼ成功した」<sup>55</sup>ことこそが問題なのである。つまり、労働者社会において、我々は何をしようともそのほとんどは労働なのであり、したがって生命過程と見做される。あらゆる活動が生存のためという意味（つまり実質的な無意味）以外の何にもならないのなら、人間が人間である、ということはもはやヒト種であること以上のことは何もない<sup>56</sup>。

アーレントは『人間の条件』において、それは労働・仕事（職人、芸術家などによる工作、創作）・活動（人間の多数性<sup>57</sup>、つまり人々のあいだで行われる諸営為、特に政治）であると主張した。まさにこれは、人間が単なる生命に尽きるわけではないことを説明する。このことは先にカンギレムの引用で述べておいた。アガンベンが人間と動物の峻別に失敗した歴史と、生物的生の発展による両者の境界線の希薄化、いわば「人間の動物化」を批判しているが、それは良し悪し以前に必然であったように思われる。どうして人間が動物ではないといえるのだろうか。アーレントやカンギレムの主張からしても、人間は動物ではないのではなく、動物以上なのだと思える方が妥当だろう<sup>58</sup>。その上で、人間的生として新たな生命論を始め

<sup>55</sup> 前掲書、188-189頁。

<sup>56</sup> アーレントはこれに対する唯一の例外を、芸術家に認めている。しかしそれは近・現代においては「個人の生命や社会の生命過程のためではない活動力」として「遊び」として扱われ、「芸術家の仕事は遊びの中に溶けてしまっており、その世界的意味は失われている」（前掲書、189頁）。これは本稿の論旨とは直接は関係ないが、別の機会にまた論じられるべき重要な議題である。

<sup>57</sup> この点を敷衍した哲学的議論として、ジャン＝リュック・ナンシー著、加藤恵介訳（2005年）『複数にして単数の存在』松籟社がある。

<sup>58</sup> 人間の特権と思われてきたようなものは大概他の動物も行なっている。シロアリは蟻塚を建設するし、ハキリアリはキノコを栽培している。ササゴイという鳥はミミズ

るべきなのだ。

#### 4. 生命論は誰の仕事か

ここまでの議論で、生物的生と人間的生が異なるものであることを述べてきた。前者は必然的に自然科学が大きく関わるため、科学者の語法を無視して議論することはできないし、後者は前者をある程度は参照すべきではあるものの、むしろ下手に自然科学を取り込むべきではない。自然科学を攻撃したところで、価値観も方法論も違うのにまともな議論ができるはずがない。とはいえ、両者を断絶するのではなく、少なくとも人文科学の観点から、後者だけでなく前者にも哲学的に考察する余地があることは既に本稿で示した。筆者には、どうしても自然科学だけで生の謎に迫れるとは思えないのである。それはヴィトゲンシュタインの次の言葉に寄っている。

たとえ、考えられるかぎりすべての科学の問いが答えられているとしても、私たちの生の問題には、まだまったく触れられていない、と私たちは感じる。もちろんこのとき問いはまさになにひとつ残っていない。そしてまさにこれが答えなのだ<sup>59</sup>。

ヴィトゲンシュタインにおいて重要なのは、よく知られる「語るができないこと」だけでなく、そもそもその前提として「語ることのできること」が何なのか、そして両者の領域はどこなのかをよく考えることのように思われる。というのも、彼の『論理哲学論考』において、最後の有名な命題以外は、ほとんど後者についての説明だからである。では彼にとって、「語ることのできること」とは何か。それは問うことができるもので

---

などを水面に投げて釣りをする。チンパンジーは枝を簡単に加工して、シロアリの塚にそれを突っ込み、シロアリを釣り上げて食べる。ミツバチは複雑なダンスによって、言語を交わすようにコミュニケーションをとる。人間は例外ではない……しかしそのすべてにおいて極めて高度なことが人間にはできるのだから、むしろ埒外と呼ぶべきかもしれない。

<sup>59</sup> ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン著、丘沢静也訳（2019年）『論理哲学論考』光文社古典新訳文庫、144頁。

あり、論理的な命題ということになる。そして、「正しい命題たちの総体が、自然科学全体（または自然科学たちの総体）である」<sup>60</sup>と彼は言う。論理構造は言うに及ばず、また自然科学（また特に数学）では言葉の意味が非常に厳格に決まっていることを考えれば、理解できることである。他方、哲学（ヴィトゲンシュタインの言う意味ではなく一般的な）は言葉の意味がしっかり定義されないことが多く、また人によって同じ言葉が全然違う意味で捉えられたりする<sup>61</sup>。無論、それが直ちに悪いということが言いたいのではなく、言葉の意味の振幅やポリフォニーをもって独自の語法としていることを示したいのである。しかし、このように言葉遣いひとつとっても方法論が全然違うのであるから、そこを弁えなければ滅茶苦茶な議論になってしまうのは必然であろう。本稿で取り上げた生や生命に関する混乱は、まさにその筆頭ではないだろうか。

ヴィトゲンシュタインは、しかしその純粋数学と論理学への関心ゆえに、明かされない生命等の謎は「語るができないもの」—神秘—として那邊へ押しやってしまった。多くの生命に共通する生にしても、自然科学の尽力にもかかわらず、定義の確立もまだ見いだせない。そして人間は人間に固有の生があるため、また別な意味を求め。哲学の語法は、厳密な言葉からこぼれ落ちるものを掬うものとして考えられるように、筆者は思う。ゆえに、「ヴィトゲンシュタインに逆らって、語りえぬものをこそ語るべきであろう」<sup>62</sup>と思われる。しかし当然、「語ることのできること」は適切に語られるべきである。こうして得られたものの布置によって、再び生命論は始まるであろう。

---

<sup>60</sup> 前掲書、48頁。

<sup>61</sup> 例えば「現存在 Da sein」は、直訳すれば「そこにある」という意味になるが、通常は人間のことを指し、ハイデッガーは「われわれ自身が各自それであり、そして問うということをも自己の存在の可能性のひとつとしてそなえているこの存在者」を術後的に表す語と説明している（マルティン・ハイデッガー著、細谷貞雄訳（1994年）『存在と時間 上』ちくま学芸文庫、38-39頁）。しかし同様の言葉はハイデッガー以前にも見られるし、その以後でも、例えばアドルノは単にそこに存在しているもの、というような意味で用いている。

<sup>62</sup> テオドール・W・アドルノ著、木田元、三島憲一ほか訳（1996年）『否定弁証法』作品社、15頁。

[参考文献]

- テオドール・W・アドルノ著，木田元，三島憲一ほか訳（1996年）『否定弁証法』作品社。
- ジョルジョ・アガンベン著，岡田温治司・多賀健太郎共訳（2011年）『開かれ 人間と動物』平凡社ライブラリー。
- ハンナ・アーレント著，志水速雄訳（1994年）『人間の条件』ちくま学芸文庫。
- ハンナ・アーレント著，ウルズラ・ルッツ，インゲボルク・ノルトマン編，青木隆嘉訳（2006年）『思索日記 2 1953~1973』（叢書 ユニベルシタス 842）法政大学出版局。
- ジョルジュ・カンギレム著，杉山吉弘訳（2002年）『生命の認識』（叢書 ユニベルシタス 735）法政大学出版局。
- ポール・デイヴィス著，水谷淳訳（2019年）『生物の中の悪魔「情報」で生命の謎を解く』SBクリエイティブ。
- ニック・レーン著，斉藤隆央訳（2016年）『生命，エネルギー，進化〔電子書籍版〕』みすず書房。
- ジャン＝リュック・ナンシー著，加藤恵介訳（2005年）『複数にして単数の存在』松籟社。
- 岡瑞起（2022年）『ALIFE | 人工生命—より生命的な AI へ〔電子書籍版〕』ビー・エヌ・エヌ。
- ジャン・ピアジェ著，滝沢武久・佐々木明共訳（1970年）『構造主義』白水社文庫クセジュ。
- 佐藤文隆（2024年）『物理学の世紀〔電子書籍版〕』講談社学術文庫。
- エルウィン・シュレーディンガー著，岡小天，鎮目恭夫訳（2018年）『生命とは何か—物理的に見た生細胞〔電子書籍版〕』岩波文庫。
- 嶋田正和・上村慎治ほか編（2019年）『大学生のための基礎シリーズ 2 生物学入門（第3版）』東京化学同人。
- アラン・ソーカル，ジャン・ブリクモン共著，田崎晴明・大野克嗣ほか共訳（2012年）『知の欺瞞—ポストモダン思想における科学の濫用』岩波現代文庫。
- ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン著，丘沢静也訳（2019年）『論理哲学論考』光文社古典新訳文庫。